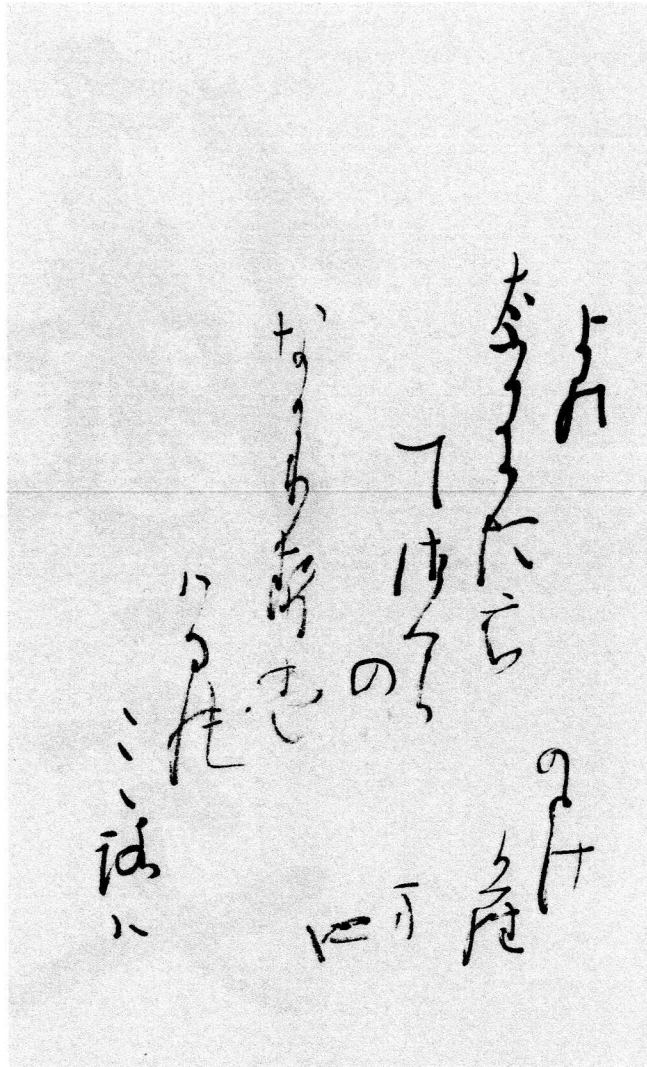


中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (九)  
— 三十六歌仙 —

世の中に たえて桜の なかりせば 春のこころは のどけからまし。

（在原業平）  
ありわらのなひら  
在原業平

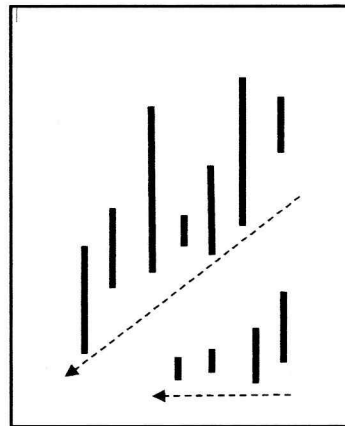
（在原業平）  
八二五（天長2）〜八八〇（元慶4）。六歌仙の一人。平城天皇皇子阿保親王の第五子。多情多感な平安時代の歌風を創った歌人。「伊勢物語」の中心的主人公と考えられています。



中村素堂先生の書

中谷春径先生提供

〈線の構成〉



〈字母〉

な 可<sup>な</sup>利<sup>か</sup>勢<sup>せ</sup>盤<sup>ばん</sup>  
こ、こ 路<sup>ろ</sup>能<sup>の</sup>ハ<sup>は</sup>  
奈<sup>な</sup>可<sup>か</sup>よ<sup>よ</sup>能<sup>の</sup>  
て 佐<sup>さ</sup>可<sup>か</sup>尔<sup>に</sup>た<sup>た</sup>え<sup>え</sup>  
の  
の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>け<sup>け</sup>  
可<sup>か</sup>万<sup>ま</sup>羅<sup>ら</sup>  
四<sup>し</sup>

〈歌意〉

「もしも世の中になつたく桜がなかったなら、春をすぎす人の心はどれほどのどかなことでしょうか。」この歌は、『古今和歌集』と『伊勢物語』の「渚の院」に載っています。

上下2集団構成で書かれています。四句を上部に「雁の乱れ」調に書き、最後の一句を軽く右下に戻って完結する「逆勝手」の技法で書かれています。（中村青藍）